

- 1 教育事業名 「いきいき自然体験キャンプ」
～とかしき島の自然と仲間からの贈り物～
- 2 ね ら い
 - ・仲間との交流をとおして参加児童・生徒同士の心のふれあいを深めさせ、子供たちの心を開くきっかけとすることができる。
 - ・渡嘉敷島の大自然の中での体験活動・集団宿泊体験への「チャレンジ」をとおして新しい自分を発見し、自己肯定感・自己有用感をもつことができる。
- 3 期 日 平成27年9月15日（火）～9月19日（土） 4泊5日
※津波注意報による船舶欠航で1日日程を延長した。
- 4 場 所 国立沖縄青少年交流の家 本館・キャンプ場・海洋研修場
- 5 募集定員 県内適応指導教室等に通級する児童生徒（小・中・高）50名程度
児童生徒の関係者（適応指導教室職員・保護者等） 20名程度
- 6 参加人数 68名
- 7 参加者内訳 小学生2名・中学生26名・高校生3名・引率29名
（男性33名、女性35名）（県内68名）
- 8 講 師

松本 大進氏（臨床心理士）	カウンセリング
植前 和代氏（心理カウンセラー）	カウンセリング
照屋 寛信氏（クラフト講師）	クラフト・野外活動
森 有紀子氏（公認スノーケリング指導員）	スノーケリング
比嘉 康裕氏（公認スノーケリング指導員）	スノーケリング

青少年の家職員

9 実施プログラム

	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
9/15 (火)			どまりん 集合・ 受付	泊港出 港フェ リー	渡嘉敷 港着移 動	昼食 (持参弁 当)	オープニング・「安心できる 環境づくり」ふれあいレク デント設営			火おこし	夕食(野外炊事) カレー		ゆどりの 時間	ふりか えり	シャ ワー	就寝 (テント)
9/16 (水)	起床 朝のリ ラックス タイム	朝食 (軽食)	トカシクチャレンジ～自然 からの贈り物～(海洋研 修)			昼食 (弁当)	トカシクチャレンジ～自然 からの贈り物～チャレンジ ゲーム・海洋研修			シャ ワー	夕食(野外炊事) ロコモコ		ゆどりの 時間	ふりか えり	シャ ワー	就寝 (テント)
9/17 (木)	起床 朝のリ ラックス タイム	朝食 (軽食)・ テント撤 収	○ ハナレチャレンジ ～自然と仲間からの贈り物～ スノーケリング・クラフト・昼食(弁当)・水泳・無人島散 策					本館へ 移動		ゆどりの 時間	オリエン テーショ ン	夕食 (食堂)	星座の 時間	ふりか えり	入浴	就寝 (本館)
9/18 (金)	起床 朝の散 歩	朝食 (食堂) 清掃	ニシヤマチャレンジ ～仲間からの贈り物～ チャレンジゲーム			昼食(食 堂)	全体ふ りかえり	アン ケート	ゆどりの 時間	教室ふ かえり	ゆどりの 時間	夕食 (食堂)		ゆどりの時間	入浴	就寝 (本館)
9/19 (土)	起床 朝の散 歩	朝食 (食堂)	清掃	エンデ ィング	移動	渡嘉敷 港出港 ライナー	泊港着 解散									

10 事業の様子

【1日目】安心出来る環境づくり



《ふれあいレクで心をほぐします》



《仲間と協力してテント設営》



《火おこしに挑戦！》



《役割分担をして、野外炊事スタート》

【2日目】トカシクチャレンジ～自然からの贈り物～



《想いを表現して共有する》



《カヤックにチャレンジ！》



《たくさんの仲間と体験スノーケリング》



《チーム対抗スイカ割り》

【3日目】ハナレチャレンジ～自然と仲間からの贈り物～



《カヌーを漕いで無人島に到着》



《きれいな海でリラックス》



《しっかり装備して海中散策へ》

【4日目】ニシヤマチャレンジ～仲間からの贈り物～



《渡嘉敷島の山の上で海に囲まれ朝ヨガ》



《チームワークでチャレンジゲーム》

11 エピソード

最終日の港で、挨拶をした1人がやってきて、実は挨拶では言わなかった一文があるとして、「日頃は教室の先生に助けられるけど、キャンプでは僕らが先生を助けられた。テントをお手本として作ったから、早くおわり、先生の分を作って恩返しができる」と話に来た。挨拶をしたことで周りから褒められ、何か誇らしげな喜びを感じている様子であった。

また、これまでレクリエーションで皆の輪に入ることができなかった生徒が、グループでの活動から始めたことで自然に参加をすることができた。

12 担当者所見

本事業は、渡嘉敷島の豊かな自然の中での宿泊体験や海洋体験活動での様々な挑戦をとおり、児童生徒同士の心のふれあいを深めさせ、集団の中における自己の発見や気づき、成長のきっかけとなることを期待して実施した。

適応指導教室の担当職員やグループリーダーのボランティアと連携し、情報を共有することで児童生徒の様子にあわせ、ゆとりをもったプログラムを展開することができた。また、「心の冒険教育」の手法で、児童生徒本人の“一歩踏み出す”勇気を大切に、まわりの支援者が後押しできるように配慮した。

津波注意報による急な日程変更があったにも関わらず、最後には子供たちや支援者の輝く笑顔が見られ、良いキャンプを皆でつくれたと感じた。

参加者代表の挨拶では、3教室4名が発表を希望し、グループ活動をすることで友達の良さがわかったこと、延泊になったからできたことがありよかったこと、グループでのアクシデントを乗り越えたことなど、皆それぞれの達成感についての言葉を聞いた。また、事業実施後に学校に通うことができた児童生徒が数名いるとの報告も受けている。

このことより、集団の力をいかした体験活動が、自己肯定感・自己有用感につながり、児童生徒が成長するきっかけとなったと考える。今後も学校に通っていない、より多くの児童生徒に“一歩踏み出す”勇気を与える事業としていきたい。